

日本文学全集

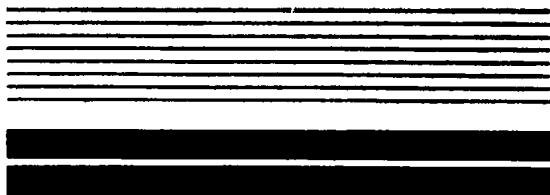
6

西鶴・近松・芭蕉

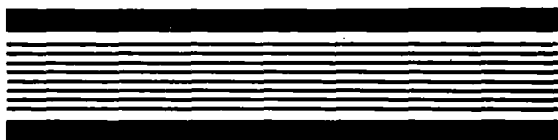


好色一代男・好色五人女
心中天の網島・奥の細道・雨月物語・他

河出書房



西鶴・近松・芭蕉



カラー版日本文学全集 6

1969©

昭和四十三年十一月三十日 初版発行
昭和四十四年十月三十日 再版発行

定価 七五〇円

訳者代表 里見 淳

発行者 中島 隆之

印刷者 草刈 龍平

装幀者 亀倉 雄策

本文印刷 中央精版印刷株式会社

口絵印刷 凸版印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

製函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クロース 日本クロス工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話・東京(292)三七一一(大代表) 振替・東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

0393-331106-0961

目次

井原西鶴

好色一代男
こうしよくいちだいおとこ

里見弴 訳 五

好色五人女
こうしよくごにんおんな

吉行淳之介 訳 三

好色一代女
こうしよくいちだいおんな

丹羽文雄 訳 二七

近松門左衛門

曾根崎心中
そねざきしんじゆう

宇野信夫 訳 一三

堀川波鼓
ほりかわなみのつづみ

田中澄江 訳 一三

平家女護島
へいけにょこのしま

武智鉄二 訳 一七

心中天の網島
しんじゆうてんあみじま

田中澄江 訳 一四

女殺油地獄
おんなころしあぶらのじごく

宇野信夫 訳 二三

松尾芭蕉

芭蕉句集ばしょうくしゅう

山本健吉訳 三〇

奥の細道おくのほそみち

山本健吉訳 二

蕪村句集うそんくしゅう

山本健吉訳 二七

一茶句集いちさくしゅう

山本健吉訳 二六

上田秋成

雨月物語うげつものがたり

円地文子訳 二五

注釈
年表

池田弥三郎 三〇

解説

戸板康二 二六

色刷口絵

鏑木清方

色刷挿画

中村貞以

近松門左衛門

伊東深水

松尾芭蕉

奥村土牛

上田秋成

鏑木清方

井原西鶴

好色一代男

里見 淳訳

巻の一

消した所が恋のはじまり

桜花の盛りはせいぜい一日、いかな明月もみるみる西山に傾いてしまふ。かく無常迅速の世を觀すれば、なんでもしたいざんまいしづくすがちと、但馬の国、生野銀山の近村から京都に出て来て、世事いっさいそつちのけの、寝てもさめても女色男色に身をもちくずし、あだ名を「夢介」と呼ばれている男があった。名古屋三左だの、加賀の八だのという、おそろいに菱の七所紋をつけたりして、当時隠れもない遊蕩児がいたが、その仲間に加わつて、片時も酒つけを絶やしたことがない。毎晩のように、一条通りを戻橋にかけて、あるときは若衆装束で練り歩くかと思えば、墨染の長袖で僧形、または鬘髻をかぶつて男達、といったふうな変装ぶりだから、場所がら、「化け物が通る」と評判をたてられたのも当然な話だ。それでも、当人たちは、大森彦七きどり、で、「いっぺんかみ殺されるほど、かわいがられてみたいよ」などとやにさがり、島原通いがつのるばかりだった。その廓の遊女で、おりしも嬌名をはせていた葛城、薫、三夕を、仲間の三人が思いおもいに身うけて、嵯峨、東山の麓、藤森のあたりにもおのしずかに住まわせ、ちぎりが重なるうち、女たちの一人で夢介

の胤を宿し、世之介と名づけられた子を生んだ者がある。あらわに書くまでもあるまい、そのへんの消息ならごんじのむきも多かるうから。

親たちの寵愛はもとよりのこと、世にいう「おんば日傘」で、「ちようちようちあわわ、かいぐりかいぐりととのめ」とあやされて、手を打ったり、頭を振りたてたりの幼さもいつか過ぎ、四歳の十一月には、髪置、あくる春には袴着という祝儀をすませ、祈願のかいあって、六つの年の痘瘡はごく軽く、あとも残らなかった。

さて、あけて七歳の夏のこと、夜半にふと目をさました世之介の、枕をのけてあくびまじりに引き鳴らす障子のかげがねの音に、次の間で宿直していた女中がそれと気づいて手燭をともし、抱きかかえて長廊下に足音を響かせながら、東北の家陰まで来て、南天の植込み、敷松葉の庭先に小便をさせたあと、手水を使わせるのに、ひしぎ竹の濡縁で足ざわりは荒いし、ひよつと釘の頭でも出ているとは、あかりをさし寄せてやると、

「そんなもの消しちゃって、もつとそばへおいでよ」と言うので、

「あなた様のお足もとがあぶのうございますから、こうしてあかりをお見せ申しますのに、暗くいたしましたでは……」

と言葉を返すと、こっくりこっくりうなずいて、

「おまえ、『恋は闇』ということを知らないんだね」

守刀を持って供をしていたもう一人の女中が、言いがままに吹き消すやいなや、その女の左の袖をひっぱって、

「そこらに乳母はいないかい？」

と、声を潜めるほどのませつぶらだった。

「たとえてみれば、天の浮橋で鶴鶴のしっぽの振りようを見て、何やら会得するところがあつたという神話そのまま、まだ男女交合の術も知らないうちから、そのきざしだけは生じているらしい」という意味を、女中たちから、逐一奥様へ言上し、あわせてお喜びをも申しそえ

たようなわけで。

この時分から次第にその気がつのつていって、同じ絵本でも、怪しげなものばかり集め、本箱のなかは、あらかた他見のはばかられるようなものばかり。

「この『菊の間』へは、わたしの呼ばないかぎりはいって来てはいけないよ」

とかたく出入りをいまいしめたりするのにも心にくい。ときに、子どもらしい折り紙細工をしても、

「これは『比翼の鳥』だよ」

とか、花を造って枝につければ、

「これが『連理の枝』さ。おまえにあげようか」

などと、それらのつたない作品を女中どもにくださるといったぐあい、何かにつけて、それへかかわりのないことはなかった。また、ふんどしをするにも人手は借りず、帯も自分で前結びにしてから背後へ回すし、兵部卿という香を袖にたきこめたり、その色っぽさといったら、おともも遠く及ばないほどで、けっこう女の気もちをとぎめかせた。だから、同じ年ごろの友だちと遊ぶにしても、空に舞っている風などには目もくれずに、

「よく『雲にかけはし』なんて言うけど、昔は天にも流星人があったのかしら」

だの、

「一年たった一度、七夕のあいびきに、もし雨が降って、会えなかったらどんな気もちだろうね」

だのと、はるかな天界のことまでいちいち色恋に結びつけてはやりきしているような子だった。

この世之介は、五十四年の生涯に、関係した女の数、三千七百四十二人、男色の相手が七百二十五人と、自分で日記につけているくらい。「筒井筒、振分髪」の、ほんのまねごとじみた情事から始まって、それほど腎水を替えはしながら、よくまあ生命がつづいたものだ。

はずかしながら文言葉

文月七日、すなわち七夕、どこもかしこもそのしたくで、一年じゅうほこりまみれにして置いた金行燈や油差し、または机、硯のよごれを洗い清めたりするために、ふだんは澄みきった川瀬もみるみるうちにあぐたの流れになってしまふ。

洛北遷返山金竜寺の入相の鐘で、ふと後醍醐帝の第九の皇子が八歳で詠まれたという和歌も思い出されるにつけ、(もはや世之介も小学に入られなければならない年になった)と心づいて、そのころちょうど山崎なる伯母の手もとに預けてあったを幸い、むかし宗鑑法師の一夜庵の跡というのに住みつづけている人が、滝本流の書をよくすると聞き、そこへ弟子入りさせてやった。ところが、のっけに手本の紙をさし出すなり、

「これへ書いていただく文章には、しょうしょう注文がございますのですが……」

と言うので、師匠の坊さんもびっくりして、

「とはまた、どう書けとおっしゃるのですか？」

「はい、では、かようにお願い申しませう。『たいそうあつかましいようですが、がまんしきれなくなつたから申しあげるのです。およびそわたくしの目つきでもおわかりのこととはぞんじます、二三日前、伯母様のお昼寝の間に、あなたの糸巻のあるとも心づかず踏み割つてしまいましたのを、なに、かまいませんよ、とばかりで、おこりになつてもよさそうなものを格別のおとがめがなかったのは、きつとあなたのほうでもわたくしにそつとおっしゃりたいことがおありなではございませんか。もしおありなら、どうぞご遠慮なくおっしゃってください。聞いてあげましょうから……』」

と、まだまだ長くなりそうな文言を並べたので、師匠もあきれ、ここまではわざと書いてやったようなものの、

「もう鳥の子紙がなくなった」

とそらとぼけてみせると、

「では、あとは尚々書にして、行と行とのあいだに書きこんでくださ
い」

と、頼むのを、

「まあまあ、またあらためてのことにしたらどうだね。今日はまずこ
れまでにしておきなさい」

と、内容が内容だけに笑うわけにもいかず、ほかにいろはを書いて
与え、これを習わせることにした。

日のくれぐれに迎いの者が来たので、世之介はそれにつれられて町
方へ帰って行った。初秋の風が急にざわめいて、伯母のうちでは、女
中たちが洗いあげての絹張り、簾をはずしたり、糊のこわい布は粘で
うったり、がやがやと騒いでいるさなかで、

「この染色のいいのはご寮人様のご普段着だけど、こっちの、撫子なごの
腰模様のある梶子色のお召物は、いったいどなたのかしら」

と一人がたずねると、ほかのが、

「そりゃあ、世之介様のお寝衣ねえさ」

おりからそれをぞんざいにたたみかけていた一季奉公の下女中が、
「そんなら、いっそのこと京へやって、あっちの水でさらさせたらよ
さそうなもんだのにねえ」

と言うのを、通りすがりに世之介が聞きとがめて、

「そんな垢だらけの手で洗わしてやるのも、『旅は情け』ということ
があればこそだ」

とつぶやいたので、下女中は、はずかしさに返答もならず、

「ごめんくださいまし」

と言いつてに逃げこもうとする袖をひかえて、

「それはいいから、この手紙をおさかさんに、そうと差しあげてお
くれ」

と頼まれるままに、あとさきの分別もなく、この家の娘に手渡しす

ると、彼女のほうではてんで覚えのないことだから、顔をまっかにし
て、

「こんなもの、いったいだれから頼まれて来たのさ」

と、腹立ちまぎれに荒っぽくしかっている騒ぎを母親が聞きつけ
て、「まあまあ」となだめてから文面を見ると、まごう方なくあの手

習師匠の筆跡と知れて二度びっくり。（書いてあることはまるつきり
とりとめがないけれど、それにしても……）と、首をかしげたが、師
の御坊こそいっつらの皮で、とんだ濡衣を着せられ、（あらたまつて
事細かに言い解くのもかえって変なぐあいなもの）と、いいわけもな
らなかつた。そのうち、口うるさいは世間の常で、おもしろ半分おひ
れをつけ、あらぬ噂の種となつた。

いっぽう、世之介に従姉を思っている由を打ち明けられた伯母は、
（今まで子どものこととばかり軽く見過ごしてきたけれど、そうでも
ない、明日は妹のところへそう言ってやって、京でも大笑いをさせて
やろう）とは思ふものの、色にも出さず、ひとり心のうちに、（わが
子ながら、顔貌もまず十人なみだし、ある家との先約はあるにして
も、年さえもう少し釣り合っているなら、世之介につかわしてもいい
のだが……）などと胸ひとつに納めて、その後氣をつけて見れば見る
ほど、することなすことごかしく、ませくさつたものだった。
いっさいほかのことならともかく、書き物だけは、うかつに引き受
けるべきでない、と、これは迷惑した坊さんの、あとあとのままでの呟言
だったとか。

人には見せぬ所

鼓も興の深いものにはちがいないが、何しろ『松風』の「跡より恋
の責め来れば」のところばかりを、明けても暮れても根氣よく打ちつ
づけているので、しまいは親の耳にも騒々しく、にわかには止めさせ
て、世を渡る男の表芸、商法見習のために、母方の親戚で、両替町

の春日屋というのへ、世之介は、客分めいた奉公に出されることになった。ところが、さっそく「死一倍」といって、親が死んで家督相続となれば、それがつい翌日の出来事であろうとも、元金を倍にして返さなければならぬ高利の金を、銀で三百目の手形で借りこんでしまった。いかに「欲の世の中」とはいえ、貸す奴も貸す奴、おとなげない話だ。

ときに世之介は九歳。端午の節句とて、菖蒲をふきかけた軒先に、見越しの柳がおい茂った木下闇の、しかも日ぐれ時、溝ぎわの篠竹の目隠し垣へ、脱いだ笹屋縞の帷子から腰巻までも投げかけて、菖蒲湯の行水をつかおうとしている中、饒きぐらいの女があった。自分のたてるかすかな水音のほかに松風ばかり、よしんば聞かれたとしても壁に耳、よもや見る目はあるまいとの気安さから、はずかしげもなく、細長いはすねの跡に残っているそのあたりの垢をこすりおとし、なおそこらへんをなで回す糠袋の膚さわりに、いつか乱れ心となって、風呂の湯玉がだんだんぎらついてこようというもの。そのけしかるふるまいを、亭に備えつけの望遠鏡片手に屋の棟にはいつくばった世之介が、まじまじと見つめているのもおかしい話で。

ふとそれに心づいた女は、顔から火の出る思いで、声もたてえず、ひたすら手を合わせて拝むのを、いっそうおもしろがり、かきにかかって、しかめつつらで指さし笑いくずれる。どうしようもなくなくて、いきなり塗下駄をつっかけて逃げ出しかける女を、目の荒い袖垣のすきまから呼び止めて、

「これこれ、ちよっとお待ち。こんばん初夜（午後八時―九時）の鐘が鳴って、みんなが寝しずまってしまったら、そううとここの切戸からはいって来て、わたしの言うことをきくんだよ」

「とんでもないことです」

「よし、そんなら今のことを、女中たちみんなに言いふらしてやるから」

とからかわれたのは、いったいどういふところを見られてしまった

のか。女中も困りきって、

「まあまあ、ともかく……」

と、あいまに、いちじの言いのがれを言った。

その晩、まさかと思うから、だれに見せるでもない夜の髪の乱れを、むぞうさに手束にかきあげたまま、うちくつろいでいる女の部屋へ、そつと忍んでくるのが世之介らしい足音。せんかたなく、いいほどにきぎげんを取り結んでおいて、小箱をひっかき回すと、芥子人形、起きあがり小法師、雲雀笛など取りそろえて、

「これはわたくしのいだいじなだいなものなんですけど、あなた様になら惜しいとは思いません。お慰みにさしあげましょう」

と、おもちゃでだましにかかったが、いっとううれしそうな様子もなく、

「今に子どもが生まれたら、泣きやませる役にはたつだろう。ほれごらん、この起きあがり小法師はおまえにほれたかして、そっちへばかりころげたがるよ」

と言うかと思うと、膝を枕にごろりと横になる様子まで、りっぱにもう一人前だった。女はまっかになって、（こんなところをひとに見られたら、よもやただごととは思うまい）との心配をむりに押ししずめ、世之介の脇腹などそつとなでさすってやりながら、

「去年の二月二日、天柱にお灸をおすえなさいましたとき、わたくしがかさぶたに塩をつけてさしあげましたけど、あの時分とは、また一段とかわいらしくおなりですわ。さあ、ここへおいでなさいまし」

と、帯をしたままのふところへ入れて、じつと抱きすくめておいて、急いで部屋を駆け出すなり、表の格子をどんどんたたきつけないが、

「世之介様の乳母さん」

と、呼びたてて、「ご無心ですがおっぱいをしようしゅうただけませんか」

と、どうやらその場をとりつくり、あとから一伍一什を話して聞

かせたところ、

「まだまだ思っていたのに、いつのまにかもうそんなふうになえ……」

と、腹をかかえてととも大笑いになった。

袖の時雨は懸るがさいわい

世之介のこさかしさは「十歳の翁」と言ってもいいくらい、生まれつき美しいところへ、小人としての身だしなみにもそつがなく、そのころ「下坂小八風」といって流行の、鬘をひつつめ、髷から離して「立懸」の結い方にしてはいる様子がいかにもなまめかしかった。当人としては目ごろから、「誘う水あらばいなんとぞ思う」の心構えにおこたりはなかったのだからけれど、よそめにはまだその道の諸分までわかつているとも見えず、いわば「雪中の梅」で、やがての花を待つここちがされた。

ある日、暗部山のあたりに住む知人をたずねて、霞網、鵜竿、赤頭巾をきせた、鼻の凹などを使っての小鳥狩に、朽ち傾いた茅の軒端や、松、桂を小楯にとったり、またはくさむらのうちに身を潜めたりして、時のたつのを忘れた。で、まだまだ遊びたりないここちながら帰路につき、麓ちかくまで来かかると、一天にわかにかき曇って、たいたことでもないがぼつぼつと落ちてきた。あいにく雨やどりをするような木陰もないので、頭の上に袖をかざしただけで、（ええ、まよ、いっそのことぬれて行けだが、墨でかいたでっこの作り髭が流れるのは困りもんだ）などと思っているところへ、その村に隠棲している男が追いついてきて、背後からそっと傘をさしかけたとも心づかず、（おや、もうやんだのか）と、振り向きざまに、

「これはどうも、ご親切、ありがとうぞんじます。今後ともおちかづきのしるしに、お名まえをお聞かせくださいませでしょうか」
と話しかけたが、ろくに返事もしず、はきかえの草履をさし置く

やら、ふところからはひどく小ざつぱりとした櫛道具まで取り出すやうにして、供の者に渡しながら、

「これで、そそけたおくれ毛をかきあげておあげなさい」

と言われたときのうれしさはどんなだったろう。いつか時雨もはれて、おりから夕虹の、今にも消えかからんばかりの風情で、いろいろ言ったあげく、

「これまでわたしには思いをはこぶ人としてなく、むなししい月日を過ごしてまいりましたのも、愛嬌の薄いせいかと、わが身でわが身を恨んでおりましたところ、今日こうしてお目にかれましたのは、まことにふしぎな御縁と申すよりほかございません。今後は親身とおぼしめしていただきとうぞんじます」

と口説きたてたが、男は冷たく、
「途中ご難儀のご様子でしたから、お世話申しただけの話。衆道のちぎりなど思いもよらぬことです」

と、取りつく島もないのに、しりかえって、小人（世之介）、手持無沙汰にしよんぼりさしうつ向きながらも、心のうちに（いい年をして恋知らずのこの男松め。みるまに老い朽ちてしまふのに……）と、相手を憫笑しながら、木陰に腰をおろし、さて言うには、

「すいぶんつれない思われ人もあればあるものですね。誠の涙も『袖をぬらす水』ぐらいにししかおくみ取りくだらないのでしょうか。孔子氣どりに納まりかえっていたあの鴨の長明にしたらが、いつとはなく門前のよか稚児さんじゃれついて、つい方丈の燈明もつけ忘れ、心の闇に迷ったというではありませんか。また月もはじろうばかりの不破万作が、勢田の橋詰で、行きずりの人の袖に蘭麝の香りを移したという故事にしても、みなこれ衆道の情けゆえではございませんか」

こうちやうちやとまくしたてても、さらにきき入れてはくれなかった。

「あの『秋の夜長物語』ではありませんが、小人のわたしから、これ

はどまでにくどくどとお願ひ申しあげるといふのは、それこそ『寺から里へ』のたとえどおりで、もとよりあべこべは知れた話ですけれど、お稚児の白糸の昔語にもおさおさひけはとらないつもりわたしの心底。さあ、いやならいやと、きっぱりおっしゃってくださいまし」と

と詰め寄ったが、いっこうに承知の様子を見せないのに、しまいにこづらにくくさえた。ややしばらくして、やっと男は口を切つて、

「では、日をかえて、中沢という村の、お宮の拝殿でお目にかかつての上のことにいたしましうか」

と、あやふやながら、後日の約束をとりかわし、いざ帰ろうという段になると、ひとしおとまた離れたくない思い。笹竹の葉を押し分けての、湿っぽい袖にすがりついて、

「風水洞の亭で、念者の蘇東坡を、先に行っていた李節推が、今か今かと待ちこがれていたという、あの気もちで、わたしもその日をお待ち申しておりますから……」

で、おいおい迫りくる夕闇のなかを、見返り、見送りつつ別れ帰った。

後日、その男が、数年来命までもと打ちこんでいる若衆にこの話をして聞かせたところ、

「それは二度と再びあらうとも思われないほどの美談です。わたしとの仲をたいせつに思われたからのことでしょうけれど、それにしてもむごいなされ方。このままにはすまされません」

と、ひそかに心を決し、二人の恋をとりもって、自分は深く身を退いてしまったという。

尋ねて聞くほどちぎり

九月十日の夕方、世之介は、昨日の菊の節句から飲みつづけのほろ

酔いきげんで、唐物屋の瀬平というのを誘い、枕詞からして新枕、伏見の里へくり出した。

東福寺の入相の鐘が響きわたるころには撞木町、言わずと知れたここが目当て。鐘屋孫右衛門の店近くで駕籠をおり、息切れがするほどの急ぎ足で、墨染の水をくむ間もおそしと、廓の南門からはいって、「なんだったて東の門は締めておくのだらう。しょうしょう回り遠い恋路じやないか」

などと戯言を言いながら、おもむろにあたりの様子を見回すと、公卿でも遊びか、冠の載りよさそうな頭のかっこうで、色の小さい男の隠れ遊び、宇治の茶師の手代とにらんだ目に狂いはなからう男、それから六地藏の馬方、淀の下りを持つ旅人、愛宕土産の櫓や棕の風呂敷包みを肩にして、緋の小銭の長さでつもりながら、氣にいったのが見つかったらと、一軒のこらず入念に見て回ったあけくが、けっきょくまた泥町のほうへ出て行くのも、はらが読めておもしろい。

世之介が素見の人足のいくらかまばらになるのを待つて、西側の中ほど、ささやかな出格子づくりで、竜田川とおぼしい襖絵も紅葉ちりぢりに破れ、煙草の煙がうっとろしくたちこめて、吸殻の捨てどころもないというような、ひどくみすばらしいある一軒の楼に立ち寄ったのは、そこで張見世していた、無口らしい、しいて人目をひこうとするふうもない、気の優しい女郎が目についたからで。見れば筆をとって、どうやら和歌の上五文字を、「袖の香ぞ」がよからうか、「きょうの菊」にしたものかと、とつおいっししている様子、それがたいそうおくゆかしく思われたので、

「この女は、どうしてこんな小店にいるのだらう」

と、きくと、瀬平、物知り顔にならずいて、

「ここの楼主というのが、廓じゅう評判の貧乏人なので、この女にはまことに気のどくなわけ。もつと醜女でも、衣装持物次第ではたちまざって見えるものですのに、ここらでは、綾目八丈、唐織など、みんな島原の大夫の着ふるしを買いこんできて、どうにかかっこうだけつ

けているしまつなので……」

と話してきかした。いずれにしろ安直な遊廓にちがいない。

二人は挨拶なしに店先に腰をおろすと、脇差 紙入などそこらにはうりだして、さてあらためて見れば見るほどいいところのある女だった。

「どうしためぐりあわせでこんな様に住みこんだのか。ことさら憂き勤め、さぞかしつらいことだらうね」

と慰めてやると、

「他人様から、心の奥底まであけすけに見とおされるといふのも、万事、はしたなくなっているせいでしょう。何かにつけてたらぬがちなところから、つい欲が出まして、お客様に物ねだりをしてしまいますが、それとてわが身につくわけではございませんのです。壁、戸障子の腰張で、すきま風を防ぎますのも、小野の炭、吉野紙、悲田院の上草履というような商売道具までも、みんな自分もちです。もの寂しく暮れてゆく雨の日、風の吹きすさぶ晩など、お茶をひくことだって珍しくはありませんし、御香の宮のお祭りから、端午の節句、藤森神社の祭礼といったぐあいに、季節季節の物日がめぐってきまして、どなたにお頼み申してその日のしたくをしていただくあてがあるわけではございませんのに、楼主さんからは遠慮会釈なく取りたてられます。それでも、どうにか二年ばかりは過ごしてまいりましたけれど、行くさきさきのことを考えますと、もうもう生きているそらはございません。片田舎においで親たちはどう暮らしなされてか、さっぱりご様子も知れませんか、ましてこんなところへたずねて来てくださるはずはございませんので……」

と、そぞろ涙にくれながらの打ち明け話。

「で、その御両親の在所というのはどこなんだね？」

「山科で、源八と申す者でございます」

との返答に、

「こうしておまえさんの客になって、そこまで打ち明けられたからに

は、まんざら他人のようにも思えない。ちかちかに一度たずねて行って、おまえさんのぶじな様子だけなりと知らせてあげようよ」

と言ったけれども、女はうれしそうな様子もみせず、

「とんでもない。おたずねくださるなんて、そんなもったいないことは、たってお辞退申しあげます。初めのころは茜草の根を掘って、どうやら暮らしをたてておりましたのですけれど、今ではほけてしまひまして、それもかなわなくなり、往き來の人の袖にすがって物ごいの身のうえ、そればかりか、因果と人様のおきらいなさる業病でして……」

起き別れてのち、そんな話をきかされながらもまだ親里をたずねてやろうという気がうせなかつたので、わざわざ山科まで出かけてみると、紫の編戸に優しくも朝顔をからませ、長押には槍一筋、埃ひとつきせず鞍を飾って、身辺からは朱鞘の大小を離さない、といったふうな父親が迎えて、ついひととおりの挨拶のあと、世之介から、実はこうこうかくかくの次第で、と来訪のわけを告げると、

「いかに女のあさはかさとはいへ、今の身のうえでいながら、他人様に親の身元を明かすとは、なんたる不所存者か」

と、くやし涙を流すのに、世之介も当惑して、さまざまに言い慰めてやった。また、どこまでも昔の素性を隠そうとした女の心がけのよさにも感服させられて、ほどなく身うけし、その後も見捨てず会いに行つた。これが、世之介十一歳の冬の初めのことで。

煩惱の垢掻き

十三夜、待宵、十五夜、いずれにしても月の名所は、あすこのこと数あるなかに、とりわけ須磨は、というので、おりからの風を幸い、貸切りの小舟で乗り出した。和田の岬を回ると、熊谷が敦盛を取っておさえて突きさした、という角の松原から塩屋へとさしかかるが、「ここらでできる酒の銘に、『源氏』とつけたのは、その時の味のよ

さをきかしたつもりかね」

と、世之介は、つれの連中を笑わせたりした。

少しばかり海の見晴らせる浜べに宿をとって、京から持参の「舞鶴」「花橋」などという酒樽の口を切り、宵のうちこそおもしろおかしく騒いでいたが、夜ふけるにつれて、月影さえもすこしばかりさえるおきもおり、夜鳥のひと声は番はなれし嬌なし鳥かと、ひとしお寂しさが身にしみて、ただのひと晩たりとも一人寝のならぬてあだから、だれ言うとなく、

「若い蠻女でもいたら呼んでこい」

世話する者があって、やがてそれへ現われた女を見ると、櫛一枚さしていい蓮々髪、顔に白粉つけなく、詰袖の、裾丈もつんつるてん、あたりが急に磯臭くなったのに、むかつく胸を延齡丹をかんてどうやら押えながらも、相変わらず口だけは達者で、

「むかし在原の行平が、流人のうさばらしとばかり、さんざ足腰をさすらせたあげく、離別の記念だと言って、香包、衛士籠、杓子、摺鉢まで、三年間の世帯道具いっさいくれてやったという、その相手がどんな奴かは知らないけれど、まずまあこの手だったんだらうなあ」

などと、冗談口の種にした。

翌朝、兵庫まで引き返してきた。この遊びの、昼夜にしきられてるばかりか、「半夜」というせわしない規定さえあるのは、なにぶん客といえ、風待している旅人ばかりといってもいい港町のせいで、今が今にも船頭と呼びたてられたが最後、小唄も途中で聞きずてに立たねばならず、さされた杯を返すいとまさえない、というあわただしさ、女に未練の残る者にとっては、さぞかし本意なく、後ろ髪を引かれる思いのことだらう。そんなわけで、おちつきも悪いし、ここからだをよごしてしまふもの、と思って、風呂屋へ行くことにした。ところがそこに、中高の、受け口で、ちよいとおつな口をきく湯女がいて、

「浮名が立つたら水をさしやあいいやね」

などしやれのめすので、

「お名まえうかがわせてちょうだいな」

わざとぎざつぽくもちかけると、ただひと言、

「忠度」

ときた。

「なるほど。それじゃあ、ただあ置けないわい」

と、あやふやながら約束をすますやいなや、たちまちがらりと様子が変わって、上がり湯はふんだんにくみ替えてくれるし、出ればさっそく香煎を持ってくる、浴衣を取って着せかける、煙草盆の火入に氣をくばる、髪盥の水を運ぶやら、鏡を貸すやら、手の裏返す現金さは、いずこいかなる土地でもかわりはない。

女のなりふりを見るに、一枚着の裾を高々とかからげ、白無地の帯をじだらくに結んで、

「なあに、切れたって抱主の損さ。久三、提灯つけとくれ」

そう言う片手に草履をひつつかんで、潜戸を出るなり、すぐもう大声あげて朋輩の陰口に始まり、つづいて朝晩のお汁が濃いいうすいの、「鉄をくれるつて約束、さては一杯くわされたかな」のたぐいで一つ残らず聞きぐるしいことばかり。

宿の座敷に通るが早いか、真綿の置帽子を取って壁へはりつけ、立ったままで行燈の向きをかねて、ほの暗いまん中あたりに座を占めると、さつそくとりあげた煙管の雁首が火のようになるまですいつけるし、のべつにあくびはする、遠慮なしに便所へは立つ、そのたびごとの障子のあけたての荒つぽさ。床にはいったと思えば、屏風一重で相部屋の朋輩に話しかける、がさごそもがいて置をせせる、ふけての鐘の音に、

「ねえねえ、あれ丑刻(午前一時)かしらう」

と、どうでもいい時刻の穿鑿、氣にいらぬ話には返事もせず、あれも、どうなとかってにしたらよからうのそっけなさ、紙は客のを使つて、あとはぐうぐう高いびき。ほっとしていると、いやに冷たい脛

を載せかけてよこして、「焚きつけるよ」の、「ああ、くみこんだよ」の、うわごとでまで稼業の知れるあさましだった。いかに貧ゆえとはいえ、いつごろからこうまでびびってしまったものか。

元来「丹前風」というのは、江戸の松平丹後守の屋敷前に、まだ湯女風呂の盛つていたころ、情合もこまやかだし、髪形から起居振舞まで、ひときわ群をぬいていた勝山というのが、袖口の広い衣装でつまを高くとるとか、そのほか何かにつけて、いっふう変わったことをしてみせ、これが流行のもととなって、一般にもはやされたのだそう。この女は、後に吉原の太夫にまで出世して、高貴なお方の枕席にもはべり、前代未聞とうたわれたが、ひと口に湯女といっても、いちじはそれほど豪勢なのがいたと聞くのに……

別れは当座払い

くすねてためた小銭を、小巾でお針女の縫ってくれた茶字縞の前巾着に入れ、下男あがりの店の若僧と何やらささやきかわしたのは、同じ心の誘い水、清水、八坂あたりへの夜遊びでもあろうか。

「おい、ここらじゃないのか、いっぞやおまえが話してた、唄がじゃうずで酒がいけて、おまけにちよいとかわいらしいのがいてるってのは。菊屋かい？ 三河屋かい？ それともこの葛屋ってのかね？」

と、心当たりをうろついたあぐく、やつとのことで萩垣にはさまれた路地の奥に、一軒、梅に鶯の屏風を立て回し、床の間には誰が弾き捨てたか、一筋糸の切れたままの檉棹の三味線が横たわり、たどんの埋み火もほの見えるうるみ朱の煙草盆、といったふうな家が目についたので、そこときめだが、薄濡りのきている畳の踏みごころは、あんまりうれいものでない。ありふれた杯と塗の竹箸とが、祇園細工の足付膳に載って出て、肴は、杉のへぎ板にはさんだ焼き物のほかに、いずこも同じ蛸、梅干、紅生薑で、さて女はと見てあれば、だらしく束ねた「四つ折」の髪、おりからの晩春にふさわしい藤色りき

い縞の小袖に、さもきいたふうな茶縞子の幅広帯をはさみ結びに締め、懷紙の間から妻楊枝のさきをのぞかせて、朝鮮紗綾の腰巻ちらちらと、左の手に朱蓋のついた煙草盆の柄をひっつかんで立ち現われ、べったり尻をすえるやいなや、

「どうしたのさ、いやにお静かねえ。ちっとお杯をはやらせたらどう？」

と、のっけから催促がましいげすっぱさ。しばらくは殻ばかりにたった榎の実をあさり散らしていたが、そうかといって、まんざらでないところもあるのさ、さされた杯を受けてやると、塩焼きのさかなのまん中あたりをぶざまにはさんで突きつけながら、

「まあ、もう一つお重ねなさいなね」

来た当座は、（これじゃあとてもやりきれないから、どこか河岸をかえて遊びなおそう）のはらでいたのに、しっきりなしの銚子の替わりめとて立ち端がなく、そのうちふと目についたのは女の腰つきで、これだけはなんとも申し分がない。

「おいおい、ここはひとつ、例の似下流でいこうぜ」

と供の者と隠語でしめしあわせて、女にもその由のみこませると、すぐさま二枚折りの花菓盛、こつこつ触れあう木枕の音もたまにはおつなもの。

女はさいぜんのりきん縞を、てつとりばやく薄よごれた浅葱の寝衣に着かえてしまい、鼻唄なんかでひと足お先に寝床に横たわって待っているという寸法。世之介とてもはや十三歳、声変わりもすみ、おとなも顔負けのなれなれしさで、

「ねえ、こんなちよんのま遊びでも、あながちこれっきりの縁たあ言えない、場所がら、観音様のお引き合わせでもあろうかね。このさきともちよくちよく会っているうちには、ひょっと腹がせり出さないもんでないが、幸い、近所に子安地藏もあることだし、お供えの餅の百や二百は、めんどうでもこのおやじ様が引き受けようから、安心して帯をとくがよいや」

などと、相手には返事の間もないほど、のべつにまくしたてながら、悪巧者に、ありったけの秘術をつくした。

こうして互いにくちとけてから、ふと女が、さしうつ向いてものを言わず、目をうるませてしまったのに、すれたようでも根が初心い世之介が、心配になって仔細を尋ねると、初めの二三次は押し黙っていたが、やがてしみじみとした調子で、

「今でこそこうした身のうえにおちてますけど、ついこの出替わりまでは、こうみえてもある宮家に御奉公申しあげてたんですよ。ところがその若宮様が、末も末もどんづまりの、あたし風情にお情けをおかけくださいましてね、そうと部屋へ忍んでいらつしやるんです。夜つびで仲よくしたあの晩のことは、……ええ、忘れもしません十一月の三日で、うっすら初雪の降った晩でしたが、もったいなくもお手ずから、『わしの膚はこれだよ』とおっしゃりながら、丸めた雪をあたしのふところに押しこまれた時の、そのおかわいらしいご様子が、今のあなたと生き写しだったので、ついあのころのあれやこれやが思い出されて……」

と、こういう話。

「ふーん。それでさ、宮様とおれと似ているといつて、いったいどくらが……」

で、またもやわるさにかかる手を、女はさりげなくかわして、

「いいえ、どこにもありませんものか、とりわけ、ひどい風の朝、『変わりはないか』とお尋ねがあった、白ぬめの小袖をくだされたり、西陣に一人ぼっちで暮らしている母の身の上までお案じくだされたり、米、味噌、薪、家賃のことまでお心をくばられるのです。わずか十一やそこらで、よくまあそこまでこまかにお気がついたもの、と感心のほかありませんでしたが、どうやらあなたもおない年か、万事によく気のおつきなざるご性分らしく思われて、ひとしおかわいさはますばかりです」

などと、年のころを見計らつての、なかなか気のきいた殺しもん

く。こんなのを、「都の人蕩」というのだとさ。

巻の二

蓬生の寝道具

この年、十四の春も過ぎて、四月朔日の衣替をさかいに、着物のふりをふさいだりしておとな仕立となつたが、「もうしばらくあのままにしておいてはしなかった」と人々に惜しまれたのも、なんとも言えぬ後姿のよさゆえだった。

ちよとした思惑もある世之介は、一人二人の供をつれて、初瀬詣と出かけた。紀貫之の「人はいさ心も知らず」が思い出される雲井の舎という坂のあたりは「香に匂」つてもいいはずの梅が、すっかりもう青葉になつている。なお山ふかく分けいつて、目ざす社に着き、柏手をうってぬかずくなり、

「誓文祈願。いつまで待たされるのでしょうか、なるべく早く、色よい返事がほしいのですが……」

とぶつぶつ口のうちに祈っているのをめれ聞いた供の者たちは、（なあんだ、またしても、祈つておいでなさるのは恋の成就かい）と、さぞふざだしたい気もちだったろう。

帰りに、満開のころの思いやられる桜井から、十市、布留の神社を北にながめて棕橋山の麓へとさしかかるころには、かれこれもう日暮れどきで、おりしも麦秋も半ばのこと、貧農の背戸にばかりと寂しい連翹の音。村童は、手に手に麦藁細工の「振籠」や「雨蛙のお家」などを振りかざしながら、そこらをはしやぎ回っている。

ふと見ると、塵塚からはい出した刀豆の蔓がからんで、風情にも実